

あ い さ つ

農林省農地局参事官 佐々木 四郎

東南アジアの農業問題については、農林省としても以前から多くの部門で研究を重ねており、また、実際に多くの人を派遣しております。その結果、ここには後進地域としての根深い問題のあることが明らかとなっており、最近になって各方面からの研究の外に、政治的、政策的にこの地域の開発ということが大きな問題として取り上げられております。農業開発の問題は単に行政的な手段によってだけでは成功しないことは、過去の幾多の事例が示すところであります。基礎的な研究としっかりした学問的基礎のない場合は、開発の結果は必ず失敗に終わっております。こうした観点に立って努力しておりますが、私どもが感じることは、個々の問題について行なってきた実績についてはある程度認めるが、総合的に、全体をつかまえて、どのような開発を進めているか——そういう点については非常に遅れているということなのであります。

個人的なことになりますが、私は前に水資源局にいまして、去る5月に UNESCO の IHD 理事会に出席しましたが、わが国には国際河川がなくヨーロッパでいう国際河川の水の開発という問題がないにもかかわらず、理事国として選ばれ、今後10ヶ年間、諸国と並んで水文上の問題に当たるということなのです。一体、IHD に対する日本の役割は何でしょうか。こういう疑問に対して感じることは、IHD のめざす一つの大きな問題が、アフリカ、東南アジア、中南米の後進地域の開発にあたること、そして、その中最も重要な東南アジアに対して、しかもその中で最も重要な問題について、日本の技術および実績が買われたということ、その結果、IHD の理事国に選ばれたという認識を深めました。日本での研究が外国では大きく評価されているということなのです。その意味からも、この問題は世界全体の立場から真剣に取り組むべきであります。

農業問題はこの地域には何としても重要な問題であり、農林省としてもこの地域の開発の仕組み、開発の方法に重大なる関心を持たざるをえません。しかし、単に農林省だけの部門でやれる問題ではなく、こういう会合が開かれ、諸機関の研究結果が一堂に集められ討議されることは非常に有意義なことと思われます。たまたま大きな台風が来て、アジアモンスーン地帯のシンボルを見せられるような何か印象的な日となりましたが、多数の御参集を得たことは喜びに堪えません。最後まで真剣に御研究、御討議をお願いします。